

くわばらひがしいなばいせき  
桑原東稻葉遺跡2次調査  
現地説明会資料

平成23年6月25日(土)10:30~  
財団法人松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター

**桑原東稻葉遺跡2次調査の概要**

所在地 松山市桑原二丁目969番、970番1の各一部  
調査期間 平成23年4月22日(水)~7月4日(月)  
調査面積 約619m<sup>2</sup>  
調査主体 財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター

**1. 調査の経過**

桑原東稻葉遺跡2次調査は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.157-①桑原遺物包含地』内における埋蔵文化財の発掘調査です。調査地が所在する松山市桑原地区では数々の発掘調査が行われ、弥生時代から近世までの遺構や遺物が見つかっています。調査地の近隣では桑原東稻葉遺跡1次調査地があり、古墳時代の竪穴住居や溝のほか、古代の溝や土坑が発見されています。また、樽味四反地遺跡5次調査では弥生時代や古墳時代の竪穴住居のほか自然流路が検出され、流路内からは古墳時代から古代の遺物が多数出土しており、この中には硯や奈良三彩など役所や寺院に関連する遺物が含まれています。

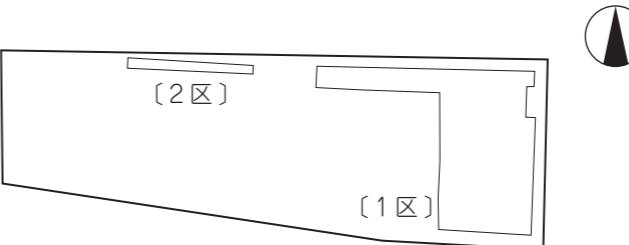
今回の調査では、弥生時代や古墳時代から古代（6世紀から8世紀頃）の建物跡や弥生時代から平安時代までの遺物が見つかりました。



第1図 調査地周辺の遺跡分布図

**2. 調査でみつかったもの**

調査では竪穴住居や掘立柱建物のほか、溝や柱穴が見つかりました。弥生時代では、2区において竪穴住居1棟(SB 2)を検出しました。SB 2は推定直径6m以上の円形住居で、住居内からは弥生時代中期後半(1世紀)頃の土器が出土しました。古墳時代の遺構は、1区で検出した竪穴住居3棟(SB 1・3・4)と溝1条(SD 3)で、これらは出土品より古墳時代後期、6世紀後半頃の遺構と考えられます。なお、溝SD 3からは復元すると完形になる須恵器环身をはじめ数多くの土器が出土しました。また、古代では掘立柱建物6棟を検出しました。このうち、3棟の建物(掘立1・3・4)は飛鳥時代中頃、他の3棟(掘立2・5・6)は奈良時代の建物と思われます。遺物は弥生時代から平安時代までに使用された土器(弥生土器・土師器・須恵器・綠釉陶器)や石器(砥石)が出土しています。

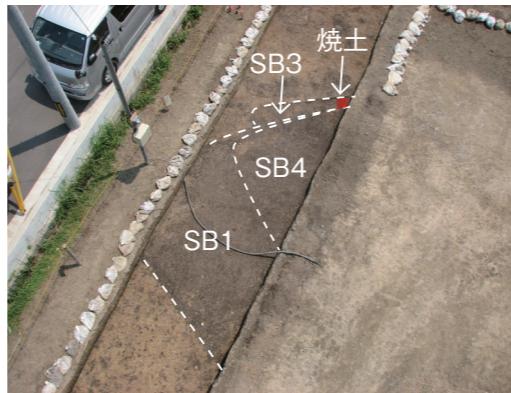


第2図 調査区位置図



調査地全景(西より)

〔検出遺構〕	
豊穴住居:	4棟
	SB2: 弥生時代中期後半 SB1・3・4: 古墳時代後期後半
掘立柱建物:	6棟
	掘立1・3・4: 飛鳥時代中頃 掘立2・5・6: 奈良時代
溝:	10条
	SD3: 古墳時代後期後半 その他の溝: 古墳時代以降
柱穴:	165基
	〔掘立柱建物柱穴40基含む〕



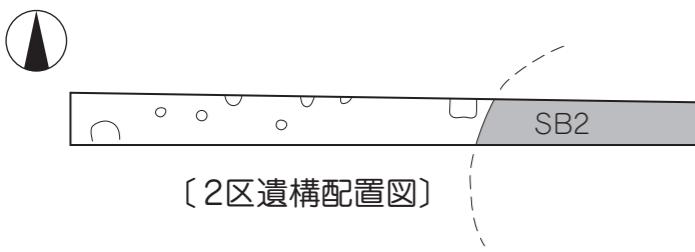
3棟の豊穴住居(SB1・3・4)は重複しており、SB3→SB1→SB4の順に作られています。なお、SB3からはカマドの痕跡と思われる焼土を検出しました。



SD3は幅60~80cm、深さ50cmの溝で溝内には水が流れています。桑原東稻葉遺跡1次調査地や桑原西稻葉遺跡2次調査地ではSD3の延長と思われる溝が発見されています。



SD3出土の須恵器壊身



2区遺構検出状況（南西より）

#### 〔用語解説〕

豊穴住居: 地面を円形や方形に掘りくぼめて作られた建物で古墳時代には住居内に『カマド』と呼ばれる調理施設が設置されています。

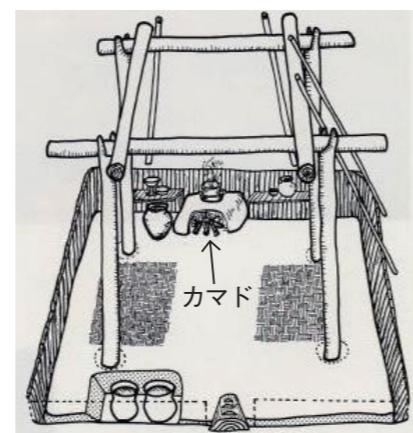
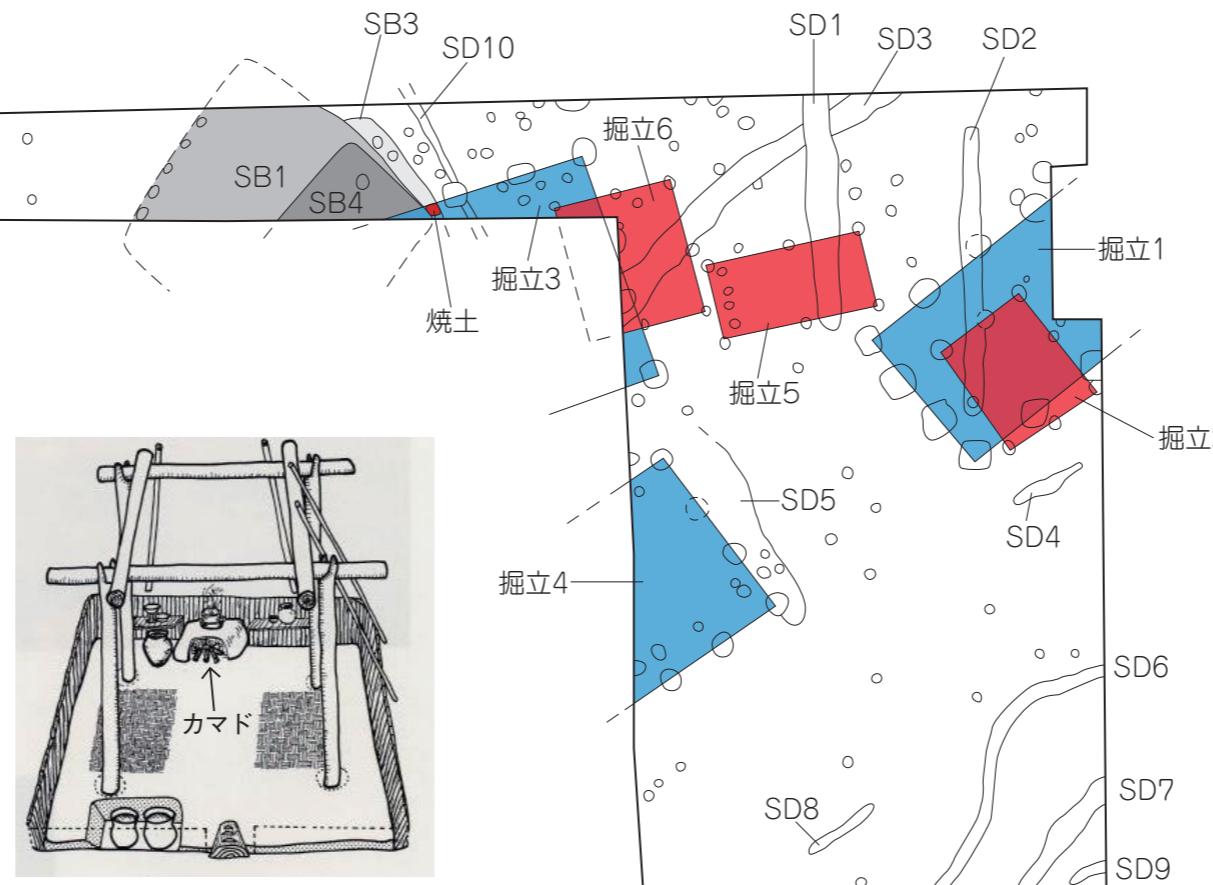
掘立柱建物: 地面に穴を掘り、そのまま柱を土中にたてた建物で、穴の底には柱を支えるための石が置かれるものもあります。

カマド: 古墳時代中期頃に朝鮮半島から伝わった調理施設で、土や粘土を使用して作られ、住居壁際に設置されました。

土師器: 古墳時代以降に使われた赤褐色の素焼の土器。

須恵器: 古墳時代中期に朝鮮半島から製作技法が伝わった青灰色を呈する硬質の土器。

緑釉陶器: 平安時代に作られた陶器で、鉛を含む緑色の釉薬を掛けて焼かれた高度な技術を要する高価な焼物。



古墳時代の家の中の様子



掘立1は南北の柱間3間(4.2m)、東西の柱間3間(6m)以上の建物で直径約15cmの柱が使われています。



1区遺構完掘状況（南西より）